

KNEWS

倉敷中央病院広報誌

Take Free

#55

2023.4



公益財団法人 大原記念倉敷中央医療機構

倉敷中央病院

「ドクターカー 新たな歴史へ始動」





おさかだ こうへい

津山市出身。2013年に岡山大学医学部を卒業し、当院に初期研修医として入職。当院循環器内科に所属し、2020年から副医長。専門は心血管インターベンション、MitraClip、心臓集中治療、成人先天性心疾患。日本循環器学会専門医、日本心血管インターベンション治療学会認定医、日本成人先天性心疾患学会認定成人先天性心疾患専門医など。家族と一緒に過ごせる朝食時間を大切にしています。

Introducing a doctor

今号ではドクターカーの出動要請に対して
中心的役割を担う医師2人を紹介します。

vol.6

循環器内科 副医長

小坂田皓平

▶ MitraClip (マイトラクリップ)

2023年3月上旬、小坂田医師(写真中央)は80歳代男性の経カテーテル僧帽弁形成術に臨んだ。手にするのはMitraClipのクリップデリバリーシステム。外科的治療のような開胸をせず、カテーテルで行う僧帽弁閉鎖不全症の治療に取り組んでいる。

治療中の心臓の詳細な状態を観察するため口から食道へ心臓超音波装置を挿入し、足の付け根の静脈から左心房まで慎重にガイドワイヤーを進める。クリップデリバリーシステムを僧帽弁の逆流がある部位に向けて操作するが、クリップを留置する場所は1mm単位での調整が必要。「3Dの画像をください」。超音波装置の画像をチーム全員で何度も確認して留置する場所が決定した。留置後の血液の逆流の有無も確認し、手術は約1.5時間で終了した。

日本でMitraClipが治療可能となったのは2018年4月。当初は全国12施設のみが実施でき、当院はその一つとして中国四国地方で初の治療施設に認定された。2023年3月末までの約5年間で284件の治療を行っている。

※MitraClipの治療などの詳細は循環器内科のホームページから
ご確認いただけます



disease
取り扱う主な疾患

僧帽弁閉鎖不全症

心臓には4つの部屋があり、血液が静脈から動脈へ一定の方向に流れるための「弁」があります。そのひとつ、僧帽弁が完全に閉じなくなり、血液が逆流する病気が僧帽弁閉鎖不全症です。弁自体の劣化や心臓の機能悪化によって発症します。症状は動作時の息切れや足・顔面のむくみなどが挙げられます。僧帽弁

閉鎖不全症が持続すると、心機能が徐々に悪くなり、入院が必要な心不全を繰り返すことで生命を縮めることにつながります。

MitraClipは非常に高齢、心臓手術の既往がある、外科的弁置換術・形成術の危険性が高い、もしくは不可能と判断された場合などに適応となります。

personality

私の目指す医師像

循環器内科医師を目指したのは、内科的なフォローだけでなく、カテーテルでの治療介入もでき、総合的に患者さんを診られるから。心臓に関して幅広くマネジメントができる医師を目指しています。

循環器疾患は高齢の方が多く、治療方針もさまざま。カテーテルなど侵襲的な治療は希望されず、自然な形で生活を望まれる方もいらつしやいます。私も結婚して子どもができ、家庭を築いています。患者さんや家族が家庭でどのように過ごされるか、より共感しながら一人ひとりのバックグラウンドもしっかり考え、治療方針を提示しています。

ドクターカーでの治療

印象深いのは2022年の春、倉敷市内の診療所から、胸の痛みを原因に受診された患者さんに急性心筋梗塞の疑いがあり、ドクターカーの出動要請を受けた件です。搬送中、当院まであとわずかの場所で心破裂が生じ、心臓マッサージをしながら帰院し、すぐに治療を行いました。

ドクターカーでの出動、循環器内科医師の同乗がなければ助からなかったであろう患者さんです。一刻を争う患者さんの治療に全力で対応しています。

引き続き自己研鑽を継続

成人先天性心疾患の患者さんにも対応しています。生まれつき複雑心奇形などの心疾患があっても、治療の進歩で成人まで成長できるようにになりました。ただ、成人になると、再手術が必要になったり、妊娠・出産といったライフイベントを経験したり、成人特有の問題点に直面します。新しい治療法が模索されている領域で、助けが必要な患者さんに応えられるよう、今後も自己研鑽を続けていきたいです。



循環器内科 副医長

生田 旭宏

▶ ドクターカーでの治療

2020～2022年度の3年間で約450件の出動があった心臓専用のドクターカー。医療機関からの要請に生田医師（写真中央）は数多く対応している。

要請の多くは急性心筋梗塞が疑われる患者さん。1分1秒を争う疾患に対していち早く治療が開始できるよう、定期的な出動訓練も行っている。

除細動器や人工呼吸器などが搭載されているとはいえ、空間・資材・人員は限られている。そのため心筋梗塞から心停止に至るなど、「状況が悪くなった場合にどうするか」に念頭を置く。実際に車内で心停止となったこともあり、その場合は搬送中から当院の治療台に患者さんを移動するまで心臓マッサージを続ける。人工心肺を確立し、緊急カテーテル治療を含めた集学的治療が必要となることも、決して珍しくはない。患者さんの命を救うべく、医師や看護師、臨床検査技師、臨床工学技士などカテーテル室の職員全員で対応している。

ドクターカーは県内に留まらず、ときには県外からの出動要請もある。長年の実績で培われた信頼に応えるべく、この一瞬も要請があれば患者さんのもとへ駆け付ける体制を整えている。

disease

取り扱う主な疾患

急性心筋梗塞

心臓を栄養する血管（冠動脈）がブランクや血栓などで詰まることで冠動脈の血流が途切れ、心筋に栄養と酸素が不足してしまい、心筋が壊死した状態を急性心筋梗塞と呼びます。

突然の締め付けられるような強い胸の痛みや圧迫感が代表的な症状です。その他には肩

や首の痛み、冷や汗を伴うことがあります。

心筋梗塞発症後はできる限り早く確実な治療が重要になります。なるべく早期に冠動脈の治療（心臓カテーテル治療やバイパス治療）を行い、血流を改善させることで心筋の壊死の量を減らし、心臓を守ることが大切です。



personality

私の目指す医師像

初期研修医時代の先輩だった循環器内科医師の姿に憧れ、専門を決めました。救命が難しいと考えられる場合でもできる限りを尽くす。私より5歳年上の先輩が体現されていた諦めない姿勢や、急性期だけではなく慢性期

まで、どの病態でも冷静に治療を行う心強い医師に、私もなりたいと強く感じました。

私の信条

心疾患の治療は、日常の生活をどのように過ごされるかが大切です。1回で10錠近くの服薬が必要なのに、なかには継続できていない患者さんもいます。医療はどうしても専門用語が多くなってしまう。それでも、できるだけ分かりやすい言葉で説明し、「先生がしっかり診てくれるから、私も頑張ろう」と前向きに治療に取り組んでいただけるよう、患者さんとのコミュニケーションを大切にしています。

医師として成長するために

例えば心筋梗塞では冠動脈の狭くなった箇所を拡げるカテーテル治療を行います。どのようにカテーテルを挿入すれば良かったか、石灰化した病変に対して選択したデバイスが最適だったのかなど、担当した症例の振り返りは欠かせません。

指導医の技を「盗む」ことも大切です。当院には多くのスペシャリストの先輩がいます。指導医の技を見て学び、疑問があれば確認する。これを繰り返して自分自身のものとして吸収できるよう心掛けています。

技術の向上により患者さんへより良い治療が提供できます。それが当院の先進医療や地域医療の貢献につながりますので、これからも研鑽を続けていきたい。

いくた あきひろ

滋賀県彦根市出身。2013年に滋賀医科大学医学部を卒業し、長浜赤十字病院や枚方公済病院を経て、2018年に当院に入職。2020年から副医長。専門は循環器学一般、心血管インターベンション、TAVI、末梢血管治療。日本循環器学会専門医、CVIT認定医、TAVR指導医、心臓リハビリテーション指導士など。学生時代はハンドボール部に所属。近くで大会が開催されると会場まで観戦しに行くこともあります。



ドクターカーを 納車しました

「救急は医の原点」という当時の院長の信念のもと、心臓に関わる救命専門の高機能救急車を導入したのは、今から約40年前の1982年。患者さんの状態をいち早く把握して専門的な治療を始めるべく、医療機関からの要請に応じて当院の循環器内科医師らが現地に赴く運用が始まりました。要請元は県内だけではなく、山陰地方や四国地方にも及んでいます。受け入れてきた多くは、急性心筋梗塞の患者さん。同行する医師が搬送中に当院で待機するスタッフと連絡を取り、治療に必要な医療機器などを準備しておくことで、帰院後の早期治療開始へとつなげます。1代目の車両は23年間走り続け、2005年に2代目へその使命を引き継ぎました。17年間で出動回数は7,000回、走行距離は34万キロを超えたため、新規車両の購入に向けたクラウドファンディングを実施しました。



納車式2日後の3月8日、救命救急センターの救急車庫に、34万キロを走行した車両と新しく導入したドクターカーが並びました。臨床工学技士をはじめ、医師や看護師、救急救命士、運転係、医療ガス課員など、ドクターカーに関わる多職種が参加し、約3時間をかけて新車両への医療機器の積み替えを行いました。

皆さまからお寄せいただいたご寄付で購入したドクターカーの納車式を、3月6日に開催いたしました。当院のクラウドファンディングは2022年7月27日から9月30日まで実施し、807の個人・団体の皆さまから計5006万3380円のご寄付をお寄せいただきました。ドクターカーの購入費は約1600万円で、残ったご寄付につきましては、救急医療の充実に向けた医療機器の購入費などに充てさせていただきます。

患者さんのために設備を充実

新しいドクターカーは、旧車両と比べて設備が充実し、**よりスムーズに重症者に対応できるようになりました。**

空間が広くとられ、必要な医療機器の搭載、医師らによる処置がしやすくなりました。

新設備 一例

①空気ポンプの設置

従来は酸素ポンプのみを設置していました。人工呼吸器を必要とする患者さんの場合、これまでは空気ポンプを別途持参する必要がありました。常設によりスペースの有効活用につなげました。ECMOや人工呼吸器の装着が必要な重症患者さんへ、より対応しやすくなり、さらに出動時の準備も簡略化されました。



②電源の増設

これまでは医療機器自体のバッテリーに頼っていましたが、バッテリーの増設で1500Wまでの医療機器に対応できます。



③医療機器の設置場所の追加

棚が少なくなり、医師らによる処置がしやすいように空間を広くとっています。



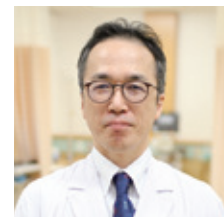
院長 山形 専

ドクターカーのクラウドファンディングでは、多くのご支援をいただき、誠にありがとうございました。「34万キロを走った」と聞くと「すごい」の一言ですが、それだけ長い間、市民の皆さまの為に走り続けたということです。新車両は機能も向上し、今後さらに活躍できると思います。一刻も早い診断・治療が求められ、現場で治療開始が必要な場面は増えていくでしょう。皆さまのご期待とご希望に添えられるように、病院としても一生懸命活用していきます。



副院長 門田 一繁

多くの方々からご支援をいただき、ドクターカーを更新できました。心臓マッサージ、電気ショック、気管内挿管など、重症の患者さんを多く搬送してきています。搬送から病院まで一連の治療を行うことで、救命できた患者さんは多くいらっしゃいます。今後も、地域の先生方とともにドクターカーを良いかたちで運用し、地域医療に貢献していきます。



副院長 福岡 敏雄

2023年は当院が救命救急センターとして認可されてから10周年を迎えます。現在、心臓専門のドクターカー以外にも新生児搬送や地域の消防隊と連携して重症外傷患者さんの搬送を行うなど、多彩な体制を整えています。そのなか、当院ドクターカーのシンボルといえる車両が市民の皆さまのご理解、ご協力のもとに更新できたことを、大変誇らしく思います。

これまで17年間にわたり、34万キロを走行した車両は役目を終えました。車を走らせてきた先人たちの想い、そしてご寄付いただいた皆さまの想いとともに、ドクターカーの新たな歴史が動き出しました。新車両のナンバーは「2023」。想いをつないだ年を刻みました。一刻を争う命のもとへ、これからも走り続けます。



倉敷中央病院からのお知らせ



創立100周年リレーコンサートを開催しています



当院の職員や、地域の音楽愛好家の方々が出演するリレーコンサートを、2月から開催しています。

当院を創立した大原孫三郎は、建設時に「病院くさくない明るい病院」を基本設計の一つとして掲げました。その理念を引継ぎ、温室や屋上庭園などを整備しています。患者さんやご家族の皆さまが安らげる環境づくりを、これからも継承・発展させていく願いを込め、リレーコンサートを企画しました。

ピアノやギターなど、さまざまな楽器が奏でる音楽をはじめ、日本舞踊やフラダンスなども披露いただき、患者さんに癒しの時間をお届けします。

開催は11月末までの毎週木曜日、12時から開演です（祝日は非開催）。詳細は下記QRコードをご参照ください。



100周年特設ページ

公式SNSで情報発信中

市民公開講座の開催状況や疾患の解説記事、
当院で勤務する職員の紹介など、さまざまな
情報を公開していますので、ぜひご覧ください！

